

15-7 資本主義的生産の発展における重商主義の国民的性格

「彼ら(重農学派——青山)には、第四部で論ぜられる他の諸功績は別としても、なによりもまず、ただ流通部面だけで機能する商業資本から生産資本に立ち帰るといふ偉大な功績がある。この点で彼らは重商主義に対立するのであって、重商主義はその粗雑な現実主義によって当時の本来の俗流経済学をなしており、この経済学の実際的な関心を前にしてはペティやその後継者たちによる科学的分析の端緒もまったく後景に押しやられてしまったのである。ついでに言えば、ここで重商主義の批判にさいして問題にするのは、ただ資本と剰余価値とについてのその見解だけである。……重金主義を受け継いだ重商主義では、決定的なものは、もはや商品価値の貨幣への転化ではなく、剰余価値の生産なのであるが、しかし流通部面の無概念的立場から見てのそれであり、したがって同時にこの剰余価値は剰余貨幣として現われ貿易収支の残額として現われるのである。しかしまた、同時に、それは、当時の利害関係者である商人や製造業者を正しく特徴づけるものであり、また、彼らによって代表される資本主義的発展の時期にふさわしいものである。……国民的資本がしだいに緩慢に産業資本に転化して行くか、それとも、保護関税を媒介としておもに土地所有者や中小の農民や手工業に課される租税によって、独立直接生産者の加速的収奪によって、資本の強行的に加速された蓄積と集積とによって、要するに資本主義的生産様式の諸条件の加速的形成によって、この転化が時間的に速められるかは、非常に大きな相違になる。……それゆえ、重商主義の国民的性格は、その代弁者たちが口にするただの空文句ではないのである。ただ国民の富と国家の資源だけを問題にするという口実のもとに、彼らは実際には資本家階級の利益と致富一般が国家の最終目的だと断言して古い天上国家にたいして市民社会を宣言するのである。しかし、同時に、そこには、資本と資本家階級との利益の発展、資本主義的生産の発展が、近代社会のなかでの国民的な力と国民的優越との基礎になっている、という意識があるのである。」

(大月版『資本論』⑤ P1006F5-1007F8)